

「やばい！ やばい！」

「かなりギリギリじゃねえか！」

「お前が最後に延長なんかするからだろ！」

「仕方ねえだろ、どうしても歌いたかったんだから！」

俺と正輝は夜の街を走っていた。

時刻はもうすぐで七時になるうとしている。俺たちが急いでいるのには訳がある。門限の時間が迫っているからだ。門限と言っても、家の門限ではなく、寮の門限だ。

「間に合わなかったらどうすんだよ!？」

「その時はその時だ！」

寮に住む俺たちにとって門限とは、一秒でも遅れる事を許されない絶対的な時間だ。そんな絶対的な物に対して、俺たちは遅れそうになっている。かなり絶望的だ。

「ダメだ！ もう無理だ！」

時計を見ると、六時五十九分五十秒。あと十秒では間に合わない事を悟った俺たちは、走る事を止めて立ち止った。

寮まで残り百メートルを切った所だろうか、目と鼻の先で時刻は七時を迎えた。

「……終わった……」

「なんてこった……」

俺と正輝は、脚が折れ、膝から崩れ落ちる。それと同時に、どうしようもない不安に襲われる。

「ここまでの頑張りは何だったんだよ!？」

正輝が地面を叩いて叫ぶ。

駅前から走り続けた五分間。汗が流れ、横っ腹が痛くなり、吐きそうになりながらも走った事、全てが無駄になった。

「おい、どうすんだよ……」

絶望を嘆いている正輝に向かって、俺は小さく言った。

「どうするも何も、遅れは遅れだ……」

「お前の延長の所為だからな！ 責任取れよ！」

人間なんて薄情なものだと思う。さっきまで口論をしながらも、お互いに諦めていなかったが、罰から逃げられないと分かると、少しでも罪を軽くしようと責任転嫁を始める。

「はあ!? 琢磨だってノリノリで歌ってたじゃねえか！」

「金を払うんだから勿体ないだろ！ お前が延長さえしなればあ！」

自分でも酷く醜い責任転嫁だと思う。しかし、これで少しでも罪が軽くなるのであれば、いくらでも醜くなってやる。

「てめえ！ 一人だけ逃れようだったってそうはいかねえからな！ あの人がそんな事で許して

くれると思うなよ!」

そうだった。あの人がこの程度の責任転嫁で見逃す訳が無い。

俺たちの言う『あの人』とは、俺たちが住んでいる寮の長の事だ。寮長は、寮に住む学生を預かっているという立場上、規則には厳しい人だ。

凜さんと呼ばれる寮長。名字は誰にも分ならず、下の名前で呼ばれている。寮長と呼ばれるのは、寮生徒の距離が近い事が主だ。凜さんも寮生の事を全員、下の名前で呼んでいる。歳は若く、寮生全員の母親であり姉の様な存在だ。

「……くっそー!」

「いい加減諦めるんだな!」

俺だけが逃げる事を良しとしない正輝が必死に道連れを作ろうとしている。不本意ではあるが、どうあがいても道連れは避けられなさそうだ。

それほどに凜さんは厳しい。自分への罰を顧みずに人助けをしたとかでもない限り規則を曲げる事はしない。しかも、それも証拠が無ければ認めてはくれない。

「くそっ。仕方ねえな」

いつまでも口論をしても仕方が無かった俺たちは、無気力状態で寮に向かった。

いつもよりも足取りが重い。気持ちは寮に向かおうとしているが、体が拒絶している。

門限に間に合わなかったとしても、寮に向かう。このまま、朝になるまでどこかで時間を潰すという選択肢は無かった。凜さん相手ではほとぼりが冷めるという事はありえない。むしろ余計に罪が重くなり、罰が厳しくなる。このまま、寮に一生戻らない覚悟が無い限り、寮に向かうしかなかった。

「さて、どうする?」

寮の前に着くと、俺たちはどちらからともなく、近くの茂みに身を隠した。そして、正輝が質問を投げかけてきた。

「出来る事なら、バレたくは無いな」

おそらく、凜さんは寮のロビーで待ち構えているだろう。門限である七時前は最も生徒の帰りが多い時間だ。その為、門限破りを見逃さない為にロビーにいる事が多い。つまり、

「正面以外から入りこむか……」

そう。正輝の言う通り、正面玄関以外のどこからか寮に入れば良い。一度、寮に入ってしまったら、こっちのものだ。後はしらを切り通せば良いだけだ。

「だけど、流石に一階はども施錠されてるだろうな」

一階が施錠されている事で、正面玄関からしか寮に入れない様になっている。一般的にはそう考えるだろう。しかし、

「二階か」

俺たち二人ともが二階に部屋が割り当てられている事が功を奏した様で、同時に同じ答えが

出てきた。それだけで、次の行動が決まった。

茂みの中を慎重に、しかし、出来る限り急いで移動する。

「俺の部屋へは難しいぞ」

寮の外壁には突起物が少なく、登るのは困難だ。あるのは雨どいぐらいなものだ。しかし、俺の部屋の近くにはそれすらも無い。

「大丈夫だ。俺の部屋の窓は雨どいのすぐ横だ」

「よくやった！」

正輝の部屋を寮への入口とし、俺たちは急いで寮の裏側へと回った。

外灯が無く、月明かりで薄らと見える寮の外壁。雨どいが屋上まで伸びているのが確認出来る。正輝の部屋がある二階までも当然、雨どいはある。イける、と俺は確信した。

「じゃあ、まずは俺が登る。琢磨、お前は後から来い」

正輝が無駄にカッコよく言って、雨どいに手を掛けた。俺は辺りを警戒する。こんな所を誰かに見られたら、間違いなく通報されてしまう。

正輝がゆっくりと登り始めた。俺はそれを横目で眺めていた。

二階まで登るのは大変だが、何か道具があればそれほどでもない。雨どいは強度的に不安があるが、それでも十分過ぎる程に効果を発揮していた。その証拠に正輝はどんどん登っていく。

「よし、窓も開いたままだ。良いぞ！」

正輝が窓を開けて、中に入っていく。俺は雨どいに手を掛けて登り始めた。

思った通り、プラスチック製の雨どいは力一杯握ってしまったら、壊れてしまうのではないかと思える程に不安定だった。しかし、それでも今の俺はこれを登りきるしかない。

俺が登り始めてすぐだった。

「おいおい、マジかよ!?!」

正輝の部屋から驚愕の声が聞こえてきた。何か信じられない光景でも部屋の中に広がっていたのだろうか。俺はそれが気になって、余計に急いで雨どいを登った。

俺は二階に辿り着き、窓枠に手を掛けて、一気に部屋に飛び込んだ。そんな俺を待ち受けていた光景。

それは、部屋の中央に正座をさせられている正輝。それと、その正輝の前に腕組をしながら仁王立ちをしているメイドの姿があった。凜さんだ。

「おいおい、マジかよ!?!」

正輝が驚愕の声を挙げた理由が分かった。安心しきっていた所に何故かメイド服を着ているラスボス登場。そんなサプライズだ。

「早く、座りなさい」

あまりの衝撃に固まっていた俺に向けて、凜さんが呟いた。小さな声の筈なのに、やたら鮮

明に聞こえてくる。もはや、既にこの空間は凜さんに支配されているようだ。

「……はい」

凜さんの言葉に逆らう事も出来ずに、俺は正輝の隣に正座した。

「さて、あなたは何をしていたの？ 正輝」

凜さんが優しく、正輝に問いかけている。しかし、それが余計に不気味さを際立たせる。なんせ、声は優しいのに、顔が全く笑っていないからだ。

「雨どいを登っていました……」

「何故？」

「門限を破ったからです……」

「何故？」

「遊びに夢中になっていたからです……」

「何故？」

「自制が出来なかったからです……」

「何故？」

「自分が未熟だからです……」

「何故？」

「自分がバカだからです……」

「何故？」

「バカだと分かっている、何の努力もしない卑しい人間だからです……」

「そう、分かっているじゃない」

正輝は凜さんに屈してしまった。凜さんが問い詰める時は決まって、このやり方だ。最終的には自らを貶めるしかない状況に追い込む。この人は絶対に天性にして真正のDSだ。

「さて、あなたは何をしていたの？ 琢磨」

正輝を屈服させた事で矛先は俺に向いた。

「雨どいを登っていました……」

「何故？」

「門限を破ったからです……」

「何故？」

「正輝の遊びに連れまわされたからです」

「へえ、そうなの」

俺はまだ諦めない。例え、可能性が低くても、俺は正輝に罪を擦り付ける。

「おい！ てめえ！」

正輝が顔だけを向けて抗議をしてくる。凜さんの手前、下手に動けないんだろう。

「で、どうなの？ 正輝」

「嘘です！ こいつも一緒になって遊んでいました！」

「それこそ嘘だ！ 俺は被害者だ！」

お互いに顔を見合わせ、口論をする。罪を擦り付けようとする俺と道連れにしようとする正輝。実に醜い。

「分かったわ」

俺たちの醜い口論に呆れた様に凜さんが口にする。俺は、出来ればこのまま呆れて、部屋を出ていって欲れないかと思った。しかし、

「理由はどうあれ、門限破りは許さないわ。それに、寮の外壁が汚れてしまったわ。それについて何か弁解はある？」

「……ありません」

やはり、凜さんには通用しなかった。もう何を言っても無駄だろう。

「じゃあ、罰を与えないとね」

凜さんは俺たちに歩み寄り、俯いていた俺たちの顔を上に向けさせる。

「ただの門限破りだったら、もう少し軽い罰だったのにな」

嗚呼、綺麗だなあ。

凜さんは極上の笑顔をしながら言っていた。次の瞬間、俺の横にいる正輝の方から、鈍い音が響いていた。

「……………え？」

気が付くと、正輝が気を失っていた。

「次はあなたよ」

凜さんの右手が大きく振りかぶっていた。

「ちょっと待ってください！ 何したんですか!?!」

「何って、お仕置きのビンタよ」

凜さんは笑みを浮かべながら答えてくる。もうダメだ。この人、楽しんでやがる。

「普通、ビンタで人は気絶しませんよ！」

「大丈夫よ。加減はするわ」

そう言いながら、凜さんは俺の頭を左手で掴んで固定する。もう逃げる術はどこにもない。

甘んじて、罰を受けるしかない。

「はい、おやすみなさい」

凜さんの声が聞こえたと同時に俺の顎に衝撃が走った。そして、意識が飛んでいった。



「ちくしょう、何とかして凜さんの横暴を止めないといけないな」

正輝が俺の前の席に着いて、言っている。

凜さんにビンタをされた翌日。俺たちはいつも通り、登校した。頬から顎にかけて、まだヒリヒリしているが、それ以外はいつも通りだ。

「確かに、凜さんとの関係は可笑しいぐらいの上下関係だな」

凜さんは寮長であるから、寮生と少なからず上下関係があるのは分かる。しかし、俺たちと凜さんの関係は可笑しいぐらいに上下関係がはっきりしている。もう少し砕けても良い気がする。

二人で顔を突き合わせて悩んでいると、そこに一人の女子生徒がやって来た。

「昨晩は盛大にお仕置きを受けたみたいだねえ」

美空が俺と正輝の頬を指で突きながら言ってくる。微妙に痛いから止めて欲しい。

「門限破りだけでこの仕打ちは絶対に間違っている！」

「と言うか、美空。何でお前が知ってるんだよ」

声を荒げている正輝を無視して、美空が何故事情を知っているのか聞いてみた。

「そりゃあ、女子の間でも話題になってたからね。壁を登ったんでしょ？」

美空が笑いながら言ってくる。どうやら、昨日の騒動は寮内でもそれなりに話題になってしまったらしい。俺としてはあまり嬉しくはない。しかし、正輝はそうではないらしい。

「マジか!? 高峰さんは何か言ってたか!？」

正輝が気にしている事。それは高峰亜姫の事だ。校内のアイドル、高根の花、言い方は様々あるが、確実に正輝には分不相応な存在の人だ。そんな人に正輝は惚れている。だから、高峰からの評価が気になって仕方が無いだろう。

「いーや、何も言ってなかったね。亜姫、特に興味無いのかもね」

そして、美空と高峰は仲が良く、正輝と高峰は直接的な面識は無い。共通の友人である美空は、さぞ大変だろう。

「なんてこった。これでもまだ足りないって言うのか……」

明日、死ぬと宣告されたかのような絶望に満ち溢れる顔で正輝が呟いた。どうしても、高峰の気を惹きたいらしい。しかし、俺は別の事が気になった。

「お前、話題作りの為にやったのか？」

今の正輝の発言から察するに、そう捉えられなくも無い。

「いや、そんな事は無いぞ。結果的に話題作りになったただけだ。それに、やるんだったら、もつと下派手な事をするさ」

「確かにね。話題作りだけの為ならインパクトは足りないかもねえ」

正輝と美空が二人で頷き合っている。

そんな時、授業が始まるチャイムが鳴った。その音を聞いて、正輝と美空は自分の席へと退散していった。

これでようやく静かになる。昨日の夜は気を失っているし、それに床で寝ていたから、逆に疲れてしまった。授業が始まるが、寝かせてもらう。仕方ないだろ？ 眠いんだから。

「そうそう、朝に言い忘れてたんだけど——」

午前の授業が全て終わり、昼休みに入ると、自然と正輝と美空が近付いてきた。昼食は三人で食べる事が通例になっている為だ。

「明日の夜に私の部屋でパジャマパーティーをやりませう！」

「え？」

「パジャマパーティー？ 要は、パジャマで夜通し喋る、あれだろ？」

「そうそう。それ！」

美空は重大発表の様に言っていたが、俺には全く重大に感じられない。勝手にやってくれ、と言ったところだ。

「俺たちも参加していいのか!？」

しかし、俺とは違い、正輝は参加する気満々だった。まあ、今ここで言うてくる訳だから、誘われていると思っても間違いではないと思う。

「ダメに決まってるでしょ！」

「何で!？」

しかし、俺たちの予想に反して、美空は正輝の参加を断って来た。絶対に来るな、という意思がハッキリを伝わってきた。

「女子だけなんだから、ダメに決まってるでしょ！」

「じゃあ、何でわざわざ俺たちに言うんだよ……」

俺は訳が分からずに、聞いていた。正輝も頷いて同意していた。

「ただ言いたかっただけ！」

美空が、妙に自信に満ち溢れた顔で言い放った。

「意味が分からねえよ……」

正輝の言葉に同意だった。何の意図があって、こんな事をしているのか……

「ちなみに、参加者の中に亜姫も入ってます！」

またしても、美空が言い放った。しかし、今度の言葉は俺と正輝で大いに反応が違った。

「うおおおおお!! 行ってえええええ!!」

美空の言葉に反応した正輝は、椅子から立ち上がって叫んでいた。おかげで、クラスメイト達が何事かと視線を向けてくる。そして、なんだ、いつもの事か、と元通りになった。

「お前、嫌みだろ!？ 嫌みなんだろ!？ ちくしょおおおお！」

男泣きをする正輝。ここまで必死になれるのはある意味すごいかもしれない。そんな風に少し感心してしまった。

「もしも、私の部屋に来れる事が出来る男子がいたら、巫姫も感心するかもねえ」

美空が小声で言った風に、俺たちに聞こえるボリュームで言っていた。俺はここで美空が何を考えているか悟った。

「マジか!? 絶対に行つてやるぜ!!」

美空の誘いに乗って、正輝が言った。しかし、俺はそれを止めた。

「落ち着け、男子が女子フロアに行くのは大変な事なんだぞ?」

寮内で男子と女子は階が違う。一、二階が男子、三、四階が女子となっている。男子フロアと女子フロアを繋ぐのは寮の中央にある階段のみ。そして、二階と三階の間にある踊り場に寮長室が存在する。男子が女子フロアに入る事はほぼ不可能だ。仮に入れたとして、その後、見つかる事があつたら、昨日の俺たち以上に酷い目に遭うのは分かりきっている。

「大丈夫だ。絶対に道はあるはずだ。俺は絶対に行つてみせるぜ!」

正輝が女子フロアに入り込む事を宣言した瞬間、美空が笑っていたのを俺は見逃さなかった。やはり、これが目的だったんだ。どうせ、面白そうだから焚き付けてみた、とか、そんな理由だろう。だから、俺は、

「ああ、そうだな。頑張れ。俺は成功を祈ってるぞ」

背中を押してやった。だって、こっちの方が面白そうだから。正輝がどんな無茶をするのか、楽しみだ。



パジャマパーティー当日。授業が終わって、俺たちは寮に帰ってきていた。そして、正輝が俺の部屋に押し掛けてきている。

「で、問題はどやって凧さん目を掻い潜るか、なんだよ」

真面目な顔で正輝が言っている。しかし、俺には関係の無い話だ。俺はただ正輝の暴走が見ただけだ。

「そこでだ! 俺が女子フロアに行くまでの間、凧さんの陽動をしてもらいたい!」

「おう、そうか。頑張れよ」

ベッドの上で雑誌を読みながら、適当にあしらってみる。

「いや、お前にやつてもらいたいんだよ」

「お前? どこにそんな奴がいるんだよ」

「お前だ、お前!」

俺を指差しながら言ってくる。仕方ないから、俺はベッドから体を起して、反応してやった。

「……………ええええええ!! 俺が凧さんをつ!!」

「バカ野郎! 声が大きいんだよ!」

大げさに反応してやったら、怒られた。どうも、納得いかない。

「この作戦は秘密裏にやらなくちゃ意味が無いんだよ！」

俺の肩を揺さぶりながら訴えてくる正輝の目は血走っていた。そこまで本気になっていたのか。

「分かった。分かったから離せ」

正輝の手を振りほどいて、ベッドに座り直す。少しぐらいは真面目に話を聞いてやるしかない。

「で、お前には凜さんの気を引いてもらいたいんだよ」

「難しくないか？」

「何か相談事のフリをして話を引き延ばせば、イけるだろ」

既に作戦の成功率が下がっていつている気がする。どう考えても難しいだろ。

「分かった、それでいこう。それで、お前はどやって行くんだ？」

凜さんの気を引く作戦は後で考えるところとして、正輝の侵入方法が気になった。

「そうだな。いくら、凜さんの目を盗んでいるとはいえ、階段を使うのは危険だろうから……」

正輝は考え込むが、女子フロアに行くには寮の中央にある階段を使う以外に道は無い。非常階段があるが、確実に鍵が掛かっているだろう。

「仕方ない。また、雨どいだな！」

爽やかな笑顔で言っている。こいつは、本物のバカなのかもしれない。

「お前、二階まで登るのは訳が違うんだぞ。落ちたら一溜りも無いぞ」

「世の中にはローリスクハイリターンなんてものは存在しないんだよ！」

良い事を言った、みたいな雰囲気ですべて正輝が言ってくる。それでも、全然格好よく見えないのは、言ったのが正輝だからだろうか。

「窓から入る気か？」

「いや、そうすると知らない女子の部屋に入る事になるからな。完全に変態犯罪者になっちゃう。とりあえず、屋上まで行って、階段を使って降りるさ」

いや、今のままでも完全に変態犯罪者の仲間入りしそうなんだけどな。

「美空の部屋の場所は分かってるのか？」

「それは大丈夫だ。昼間に聞いておいた」

「……分かったよ。もう何も言わねえよ」

正輝は呆れてくるぐらいのバカだった。これ以上、何を言っても作戦に変更は無いだろう。

「で、報酬は何だ？」

「報酬？」

俺の言葉を聞いて、正輝が首を傾げた。

「報酬だよ。無償でこんな危険な事に協力する訳ないだろ」

正輝に協力すれば、発覚時に共犯者扱いになってしまう。それだけのリスクを孕んでいるんだから、報酬を貰うのは当然だ。

「報酬か…… 考えてなかったな」

「そうか。じゃあ、昼飯を奢れよ」

「そうか？ じゃあ、そうしてくれ」

正輝は何の疑問を持たずに俺の提案を承諾した。いつか、吐くぐらい食って正輝の財布を空にしてやろう。

夕食後、俺は正輝の部屋に呼ばれた。

「そろそろ、作戦開始だ」

「もう行くのか？」

まだ夕食が終わってすぐの時間だ。パジャマパーティーって言うぐらいだから、もっと遅い時間だと思っただが、

「早いの越した事は無いだろ」

正輝の言う事は一理ある。大は小を兼ねるって言うしな。

「そんな訳だから、お前は凜さんをよろしく頼むぞ」

早く行きたくてうずうずしていた様で、正輝は言葉も少なく、窓の外の雨どいに手を掛け、体を外に投げ出した。

「……仕方ねえな」

雨どいを登っていく正輝を見送って、俺は寮長室に向かった。

二階と三階の間の踊り場。そこにある寮長室。俺はドアをノックして、凜さんがいるかを確認した。

静かな踊り場にノックの音が響く。すると、部屋の中から妙に慌ただしい音が聞こえてきた。寝ていた時に急に起こされた様な感じだ。

「……はい」

音が鳴りやんで、凜さんが現れた。しかし、ドアの隙間から見せた姿は顔だけだった。

ドアを最低限だけ開いて、顔を除かせている。

「あの、今、大丈夫でしたか？」

「……ええ、まあ」

明らかにいつもと違う雰囲気。凜さんに少し動揺してしまう。こっちとしては、いつもの凜さんを想定していた分。

「少し、相談したい事があった……」

「なるほど、相談ね。少し待っていて」

そう言って、凜さんが部屋に引っ込んだ。

俺はどうも凧さんの様子が気になった。いつもなら、あのメイド服を着ているはずなのに、今は違った様に見えた。

「完全に気を抜いていたな」

いつも完璧に物事をこなす凧さんが見せた素の状態。俺はそこに勝機があると見た。そこを突けば、話を長引かせる事も可能なはずだ。

しばらくして、凧さんがいつものメイド姿で現れた。

「じゃあ、行きましょう」

そう言っつて、寮長室から離れていく。

「ここで話すんじゃないんですか？」

「……そこは私の部屋よ。真面目な話なら別の場所が良いでしょ？」

「いえいえ、俺はここで構いませんよ」

そう言いながら、寮長室の部屋のドアに手を掛けると、凧さんがすごい勢いで戻ってきた。そして、俺の腕を絞め上げながら、

「別の場所が良いでしょ？」

説教を喰らう時に見せる表情よりも怖い表情をしていた。

「……はい」

俺の返事を聞いて、凧さんは再び歩き出した。俺はそれに黙ってついて行くしかなかった。一体、何がそんなに都合が悪いんだ？

凧さんの後に続いて階段を下りていく途中、あのバカがどうなっているか気になった。今頃、あいつはどこまで行ったんだろうな。

雨どいを登って、屋上を目指した正輝はどこまで登ったんだろう。既に屋上にいるなんて事は無いだろう。そもそも、窓の所を通る時に人に見られたら、一貫の終わりだな。

まあ、まだ騒ぎになってないから、バレてないんだろ。

凧さんに連れられて、俺は寮のロビーにやって来た。

「ここで良い？」

「大丈夫ですよ」

ロビーにあるソファに座って、凧さんと対面する。

「で、相談って何？」

凧さんは膝の上で手を重ねて、きつちと座りながら聞いてきた。

「……そういえば、さっき、何か焦ってませんでした？」

俺はすぐに相談を持ちかけないで、世間話をして時間を稼ごうとした。まあ、相談事なんて何も無いから、本当に時間稼いだ。

「そんな事は無いわよ」

「そうですか？ さっきは服装も違ったみたいだし」

「——そんな事は無いわ」

凜さんは明らかに動揺していた。そこで、俺は間髪入れずに話を続ける。

「そういや、前から気になってたんですけど、凜さんって、何でメイド服なんですか？」

これは本当に前から気になっていた事だ。寮長なのにメイド服。ハッキリ言って、意味が分からない。

「寮長と言うのは親御さんから生徒を預かっているのよ。そして、生徒の世話をするからよ。古くから、世話係はこの服装と相場が決まっているわ。教育係も兼任しているけどね」

凜さんは真つ直ぐに俺の目を見て、答えてきた。今までの動揺はどこかに消えたようだった。と言うよりも、機械的に答えただけだったのかもしれない。今までも何度も同じ様な質問をした奴がいるんだろう。そりゃあ、みんな気になるよ。

「で、そんな事よりも相談って——」

「凜さんっていくつですか!？」

話を元に戻そうとする凜さんに対して、俺は何とか時間を稼ごうと必死だった。凜さんの言葉を遮ってまで別の話題を振る。

「二十五よ。それがどうしたの?」

「へえ、やっぱり、若いんですね。でも、何で寮長なんてやってるんですか? イメージではもっと歳がいった人がやる感じがするんですけど……」

「……………」

凜さんがジッと俺を見つめてくる。何か可笑しいと気付き始めているみたいだ。

「……私はこの卒業生で、祖母が寮長をやっていたのよ。それで、大学時代に教育実習の為にここに来た時に、今の校長先生に頼まれたのよ、祖母が亡くなって、寮長が不在だったのよ」

凜さんが遠い目をしながら語っていた。ただの時間稼ぎが妙な身の上話に発展してしまった。

「それで、元々、教員になるつもりだったから承諾したの」

今さら、時間稼ぎとは言いだせない雰囲気になって来た。このまま別の話をして相談事はうやむやにしてしまおう。

「でも、教師になりたかったんじゃないんですか?」

「確かにね。でも、校長先生に頼まれて考えた時に、教師よりも寮長の方が生徒たちとの距離が近くて変な壁が無いと思ったのよ」

「てっきり、寮の治安維持の為に雇われたどこかの格闘家かと思いましたよ」

凜さんは強い。寮の学生が束になっても勝てないかと思うぐらいに強い。

「ああ、護身術として合気道を習っていたからね」

「それにしても、強すぎますよ」

この前のビンタなんて、思わず気絶してしまうぐらいだ。もうどこぞの達人レベルだ。

「そりゃあ、皆伝を貰ってるからね」

凜さんが意地の悪そうな笑みを浮かべて言ってくる。

「どうせ、学生を痛めつけて楽しんでるんでしょ?」

「そんな事無いわよ。それにあれは教育的指導よ。でも、倒されても倒されても、何度も立ち向かってくる学生を相手にするのは楽しいわ」

遂にぶっっちゃけた。自らDS発言だ。

「そんな事より! 相談って何なの? まさか、何も無いの?」

凜さんが俺の顔を覗き込んでくる。蛇に睨まれた蛙とはまさにこの事だろう。もういっその事、全てを白状して良い気がしてきた。密告してしまえば、罰を受けるのは正輝だけだ。

俺が正輝を売るかどうか悩んでいる時だった。寮の三階から女生徒の悲鳴が聞こえてきた。

「————っ!!」

凜さんはソファから立ち上がり、物凄い勢いで階段を駆け上がっていた。俺もその後が続いた。どうせ、正輝が見つかったからだと思っただからだ。

「どうしたの!?!」

悲鳴が聞こえてきた三階に上がった凜さんが叫んだ。俺もそのすぐ後に三階まで上がって来た。

「男子生徒が……」

女生徒の一人が指差す先には、必死に弁解をする正輝の姿があった。

「だから、俺は誘われたんだよ! なあ、美空!」

「さあ? そうだったっけ?」

救いを求める正輝をあっさりと見捨てる美空。美空はいつも正輝を焼き付けて、自分が危なくなるるとすぐに掌を返す。

「あんたが勝手に来たんじゃない……」

自分は被害者だと主張する様に美空が演技をする。美空も中々酷い奴だが、毎回、騙される正輝も正輝だと思う。

「正輝、そこで何をしているの?」

凜さんが正輝にゆっくりと獲物を逃さない様にジリジリと近付いて行く。ただ正輝に向かつて歩いているだけなのに、いつでも正輝に飛び掛かりそうな雰囲気だ。

「だから、俺は美空に誘われたんだって!」

「そうなの? 美空」

「違います。正輝が勝手に来ただけです」

「違うらしいわよ?」

美空に突き放され、目の前には臨戦態勢の凜さん。正輝はどこにも逃げ場が無かった。しかし、

「あっ! おい、琢磨! 説明してくれっ!」

階段の途中から、顔だけを除かせていた俺に気付いた正輝が手を振ってくる。

あの野郎。何であの状況で気付くんだよ！

「……琢磨？」

凜さんが俺の方を振り返ってくる。

「あんたも共犯だったの？」

凜さんに睨まれ、正輝に助けを求められ、俺は考えた。自身の体と友情。どちらを取るか。

そして、

「そんな事ありません。あいつが勝手にやった事です」

正輝を売った。

「てめえええ！ 裏切りやがったなあ！」

正輝が俺に向かって叫ぶ。しかし、俺は正輝とは目を合わせなかった。

「正輝、あんたは……」

凜さんはため息を吐いた。呆れた様な感じで言葉を発する。そして、次の瞬間、

「……………絶対に許さないわよ」

凜さんの鋭い言葉に俺はビビってしまった。自分が言われている訳では無いが、もし、自分に向けられた言葉だと思おうと……

「ちくしょう。言い逃れは出来ないみたいだな！」

しかし、正輝は違った。いつもなら俺と一緒にビビっているはずなのだが、今回はそんな様子がどこにも無かった。

「……………」

凜さんもいつもと違う正輝の態度に少なからず動揺しているみたいだった。

「俺だってな、何もしてこなかった訳じゃないぜ！ 凜さんと対峙する時の為にな——」

妙に正輝が男らしく見える。動機は不純だが、言っている事は格好いい。

「毎日、イメトレしてきたんだぜ！」

イメトレ。イメージトレーニング。頭の中で練習をする事だ。

どうしよう、正輝の事がどうしようもなく格好悪く見えてきた。イメトレだけで強くなれるなら、正輝でも格闘技の世界チャンピオンになれてしまう。

「……………あいつ、終わったな」

俺はいつもと変わらない結果が待っている事を確信した。

「……………ふう」

もう一度、凜さんがため息を吐いた。本当に呆れているようだ。でも、そんな事で女子フロア侵入の罪が許される訳も無く、正輝は凜さんによってボコボコにされた。



「絶対におかしい！」

先日と同様に、正輝が俺の前の席に座り、嘆いている。

「あの人は人間的にチートだろ！」

凜さんの罰を受け、正輝は半殺し状態で部屋まで運ばれた。その後、朝になるまでピクリともしなかった。本人曰く、生死の境を彷徨った、とのことだ。

「確かにあの強さは尋常じゃなかったな」

女子フロアに忍び込んだ正輝とそれを排除しようとする凜さんの戦いは、実に圧倒的だった。正輝が飛びかかれば鮮やかに避け、殴りかかれば弾かれ、掴んだとしても手を捻られて逆に投げ飛ばされていた。流石、合気道の皆伝会得者だ。

「向こうから仕掛けてこないのが、余計に屈辱的なんだよっ！」

合気道はやはり後手が主体だった。正輝の動きに合わせて、汗一つ掻かずにねじ伏せていた。あれはもう護身術の域を超えている。それに、最早、殺人術ではないかと思うぐらいの威力だった。

その証拠に、正輝の顔はシップや包帯でミイラのような事になっている。服で隠れた部分も、痣が酷かった。

「でも、正輝がイケない事をしたのが悪いんだ、よっ！」

「だああああおお!!」

ひよっこりやって来た美空が正輝の体を平手で叩くと、正輝の体が跳ね上がって硬直した。「おおおおおお!!」

全身の痛みに悶えながら、正輝が美空を睨んでいる。しかし、美空は全く悪びれていなかった。笑っている。

「流石に女子フロアに行くのはバカだろ」

「ホントだよねえ」

正輝のバカさ加減に俺と美空が笑っていると、痛みから解放されつつある正輝が口を尖らせて抗議してきた。

「大体、元はと言えば美空が誘ってきたんだからな！ それにお前も何で凜さんを引き留めておいてくれなかったんだよ！」

机を叩きながら言っている正輝。しかし、俺と美空はそれに冷静に答える。

「いや、私は誘って無いよ。もし来れたらすごいなあって言っただけで」

「俺は引き留めてたぞ。でも、お前が見つかったから凜さんがそっちに行っただぞ」

俺と美空には何の落ち度も無い。正輝が勝手にやった行動。そう言ってしまうば、納得せざるを得ない状況だ。

「お前達はいつもそうだ！ 絶対、どこかに逃げ道を用意してやがる！」

「そりゃそうでしょ？ 何であんたと一緒に怒られなくちゃいけないの」

美空の言う事は最もだ。俺だって、正輝のバカに付き合っただけで無意味に怒られるのは避けたい。

「くそ。でも、何とかして凛さんをギャフンと言わせたいぜ」

真顔で正輝が言っている。俺はまさか『ギャフン』なんて言葉を実際に使う奴がいる事になからず驚いていた。

「それは難しいと思うよ」

「何でだよ？」

「だって、考えてみてよ。凛さんが気を緩めた所なんて見た事ある？」

美空の言葉に正輝が少し考え込んでから答えた。

「……ないな」

「でしょ？ 常にあの状態なんだよ」

確かに、凛さんの素の状態はハッキリと見た事は無いな。昨日は素が出掛けていたけど。

「何か、弱点が分かれば良いんだけどなあ」

天井を仰ぎ見る正輝。さっきまで意気込んでいた割には、既に頓挫しそうな計画だった。「じゃあ、まずは敵情をよく知る事だね！」

名案とばかりに美空が手を打って言う。

「そうだな。まずは敵情視察だな」

「となると、やっぱり、寮長室だねえ」

「そーいや、琢磨は昨日、入らなかったのか？」

正輝の言葉で俺は昨日の事を思い出す。

「昨日はロビーで話してたからな。でも、寮長室に入ろうとしたら、すごい拒んできたな」

「マジか!? やっぱ、何かあるな」

「そうだね。寮長室の実態を知る、これが第一目標だね」

「そうと決まれば、寮長室に忍び込む作戦を練らなくちゃいけないよ！」

正輝がやる気に満ち満ちた表情で言っている。

「部屋に入ったら特にクローゼットを見なくちゃね。ここは外せないよ！」

美空が念を押す様に言っている。でも、女性の部屋のクローゼットを見るのはマズイ気がする。

正輝と美空が寮長室に忍び込む為の作戦を話しあっている。やるべき事がハッキリと決まってる、やる気に満ち溢れているみたいだ。

数日後。正輝の体の回復を待って、作戦は決行された。しかし、前回の女子フロア侵入の失敗を踏まえていないのか、今回も似た様な陳腐な作戦だった。

美空が凛さんの気を引き、その間に俺と正輝が寮長室に忍び込む。

これほどに陳腐な作戦があるだろうか。無理矢理、作戦に参加させられる事になった俺は正輝のストッパー役らしい。美空に至っては、たとえバレても言い訳が出来る役割に甘んじている。実に抜け目ない奴だ。

予定通り、美空が凜さんを連れ出した頃、俺と正輝は行動を開始した。

「やっぱり、鍵が掛かってるぞ」

寮長室のドアを開けようとしても鍵が掛かっていて、決して開く事は無かった。しかし、正輝はそれでも余裕の表情を見せていた。

「そんな事を想定通りだ。しかし、今の俺にはこんな寮の鍵なんて無いも同然！」

そう言って、取り出したのはピッキングツールだった。

「今日、この日の為に必死に練習したんだぜえ。おかげで、俺の部屋の鍵は壊れちゃったけどな！」

犯罪行為の告白と自虐を同時に行った正輝は無駄に清々しかった。何かに夢中になれるという事は良い事なのだろうけど、行き先は間違えたくはないな。

正輝が鍵穴にピッキングツールを入れてしばらくすると、鍵が開く音が聞こえてきた。

「イエース！ ほらな！」

「おお、これはすごいな」

素直に感心する。わざわざこの為に練習してきた甲斐があっただろう。頑張るベクトルを間違えてはいるが。それと、何故、外人風だったのが気になった。

部屋は俺たちの部屋と変わりが無かった。特に飾り気の無い部屋。没個性と言ったところだろう。しかし、俺たちの部屋と違い、良い香りがした。

「あれ？」

正輝も同じ印象を受けたようで、予想外といった声を上げていた。

「なんもねえじゃねえか」

遠慮なく部屋に侵入していく正輝。この男には罪悪感と言う物が無いのだろうか。

「よし！ じゃあ、漁るか」

こいつは犯罪を犯罪と思わないで罪を犯しそうだな。気付いたら犯罪者。そんな末路が待っているぞうだ。むしろ、そんな末路がお似合いだ。

俺は鍵を掛けて、部屋に上がる。既に正輝は机周りを丹念に漁っていた。

そんな正輝を無視して、俺は窓から外を眺める。寮の裏側に位置している部屋なので、見晴らしが良い場所では無かった。見えるものと言えば、住宅地、それと寮の裏にある駐輪場の屋根ぐらいなものだ。

「おい、本当に何にも無いぞ……」

絶望した表情の正輝が言ってくる。人の部屋に勝手に上がり込んで、弱点に繋がる物が何も無いと嘆いている。実に勝手な奴だ。

「あの人は本当に完璧な人なのかもしれねえ……」

「そもそも、寮長室に何か見られたら恥ずかしい様な物は無いだろ」

そう言いながら部屋を見渡す。本当に何の個性も感じられない部屋だ。その中で、俺の目を引いた物。それはデジカメだった。

「これの中身は見たか？」

デジカメを手に持って、聞いてみる。

「流石にそれはまずいんじゃないか？」

まさか、ここにきて正輝からそんな言葉が聞けるとは思わなかった。やっぱりこいつは悪人になりきれない様だ。

「ここまで来たら覚悟を決めろ。それに、もしかしたら、素の凜さんが写ってるんじゃないか？」

「……有り得るな」

わざわざ写真を撮る時まで完璧を演じているとは到底思えない。

デジカメの電源を入れて、過去の写真を見ていく。

「どうだ？ 何か写ってたか？」

俺はデジカメの中にあつた写真を見て、驚愕した。

「……ああ。すごいのが写ってるぞ」

正輝の問いに俺は戸惑いながら答えた。なぜなら、デジカメには凜さんが様々な服を着て、アイドルみたいなポーズをしている写真が大量に入っていたからだ。

「……ほら」

それを見た正輝は固まった。

「……なんだ。これ……」

「凜さん……だよな？」

あまりの光景に俺は正輝に確認を取った。正輝もそれに無言で頷いてくる。間違いなく、写真に写っているのは凜さんだ。それが、可愛い服を着て、ポーズまで決めている。

「これはすごい発見じゃないか？」

デジカメを見ながら、ニヤついている正輝。これ以上無い下衆の笑みを浮かべている。

「確かに下級の発見だな」

俺も次第に凜さんの素性が気になって来た。こんな写真を見せられたら、気にするなど言うのが無理な相談だ。

「おい、クローゼットを開けようぜ！」

正輝が言ってくる。美空に念を押されていたが、今までクローゼットには一切手を付けていなかった。住居不法侵入を既にしてているが、流石に衣類を漁るのはマズイと思っていたからだ。

しかし、今の俺たちにそんな事を考える余裕はどこにも無かった。

「おうよ！ こうなったら徹底的にやっつてやろうぜ！」

俺と正輝はクローゼットに手を掛けて、一気に開く。

「……………おお」

クローゼットの中には、俺たちの期待通り、様々な服が数え切れないほどあった。中にはコスプレの様な服まであった。

「すげえ……すげえよ！ 大発見だ！」

正輝がクローゼットの中から一着だけ取り出し、眺めている。

「まさか、凜さんにこんな趣味があったとは……」

いつもクールで完璧な凜さんが可愛らしい服を着ているとは全く想像していなかった。しかも、写真の中の凜さんは今まで見た事も無い笑顔だった。

今にして思えば、メイド服もこれの延長だったのかもしれない。この前はそれらしい事を言われて納得した気になっていたが、やっぱり可笑しいだろ。寮長でメイド服って……

「これは、弱点と言って良いよな？」

正輝が服を片手に聞いてくる。

「だよな。今まで隠してたわけだし」

美空はもしかして何か知っているのかもしれない。まるでクローゼットの中にこの服がある事を知っていた様な口ぶりだった。

「よし。これで、凜さんの悪政を叩き壊せるぞ。来たぜ！ 俺の時代がっ！」

喜びに打ちひしがれている正輝。しかし、その時だった。寮長室の外、階段の方から足音が聞こえてきた。

寮長室があるのは二階と三階の間。そこを歩き来するのは登下校、夕食、入浴時に女子がするだけ。今はそのどれでも無い。つまり、今ここに向かって来ているのは、そのどれにも属さずに行き来する人間、凜さん以外に他ならない。

「……やべえ、やべえやべえやべえ！」

正輝が慌てながら言っている。俺も一気に心拍数が跳ね上がる。今ここで見つかったら、殺されてしまうかもしれない。しかし、ドアから出れば、確実に凜さんと鉢合わせになる。

やばい、どうする？ もうドアから逃げられないし、言い訳をしても無駄、やばい、どうする？

焦りながらも少しだけ冷静に考えてみる。この状況を打破するには、隠れてやり過ごすか、ドア以外の場所から逃げるかのどちらかだ。

そして、俺は窓から逃げる事を選択した。さっき窓から見た景色に駐輪場の屋根があった。二階以上の高さがあるとは言え、駐輪場の屋根伝いに逃げる事が出来るはずだ。

俺は窓を開けて飛び降りようとする。正輝はと言うと、俺とは別に隠れる事を選択したようだった。クローゼットの中に隠れようとしていた。

「じゃあな！ 見つかるなよ！」

「お前こそ誰にも見られるなよ！」

お互いに激励し合い、俺たちは別れた。

俺は寮長室の窓から駐輪場の屋根に飛び降りた。着地の際、大きな音が立ってしまったとか、靴下が汚れるとか、そんな事を気にせずに、急いでその場を離れた。

正面玄関に回り込んだ俺は誰にも見つからない様に寮の中に入った。門限が過ぎている為、ここで誰かに見つければ凧さんの耳に入る可能性があるからだ。寮に入った所で俺は少しだけ安心した。後は何食わぬ顔で部屋に戻ればお終いだ。

ロビーを抜けて部屋に戻ろうとした俺の前に見知った顔があった。さっきまで凧さんと話していた美空だ。

「あれ？ 琢磨。何で外から？」

俺に気付いた美空が声を掛けてくる。

「寮長室の窓から逃げてきたからな」

「そんなに危なかったの？」

「そりゃあな。まだ正輝は部屋に隠れてるぞ」

「……大丈夫なの？」

「いや、ダメだろ。確実に」

正輝が見つかる姿が容易に想像できる。部屋から駐輪場の屋根を見ただけの、そんなほんの少しの差でも結果が変わってしまうなんて。あいつも運が無いな。

「さて、俺たちは部屋に戻るか。あまりここに長居するのもマズイだろ」

ロビーで美空という所を見られたら、凧さんに勘付かれるかもしれない。そうでなくても、正輝が見つければ、俺まで疑われるんだから。

美空と別れて俺は部屋に戻った。

「なんか疲れたな……」

極度の緊張の連続の所為か、俺はいつも以上に疲れていた。いつもならまだ寝ない時間だったが、俺はそのまま眠りに就いた。

正輝の事は今だけ忘れよう。どうせ、俺が何かした所であいつがどうしようもない事は変わらないしな。



翌日、俺はいつもより早く目が覚めた。もう一度、寝ようと思ったが、十分過ぎる程に眠った所為で目が覚めている。仕方なく、ベッドから体を起こす事にした。

休みだと言う事もあって、寮の中は静かでもまだ誰も起きていない事が分かった。俺だっていつもなら爆睡している時間だ。

そう言えば、あいつはどうなったかな。

結局、正輝がどうなったかを俺は知らない。昨日は眠気に負けてしまったが、あいつの最後を見届けた手前、どうなったか気になってしまった。

俺は自分の部屋を出て、正輝の部屋を訪れた。しかし、いくらドアをノックしても中から返事は無かった。

寝てるのか？

ノックに気付いていないのかもしれないと思った俺は携帯に電話を掛けてみる事にした。いくら正輝でもこれなら目を覚ますだろ。

しかし、電話は繋がらなかった。電源が切られているみたいだ。

まさか、まだ戻ってないのか？

冗談だろ、と笑いが込み上げてくる。

昨日、寮長室のクローゼットに隠れてから、今もまだ隠れているのか。

女性の部屋のクローゼットの中で一晩中過ごす。これだけ聞けば、ストーカーが部屋に忍び込んだみたいに関心されてくる。あいつ、犯罪者から性犯罪者にランクアップしやがった。

しかし、ここまで来たら、絶対に見つかって欲しくは無い。それで完全犯罪が成立するんだから。

そんな事を考えながら、俺は正輝の部屋を離れ、喉の渇きを潤す為に食堂に足を運んだ。

ロビーを通って食堂に向かおうとした。しかし、ロビーには俺の目を疑う様な光景が広がっていた。

「……………おおう」

上半身裸で痣だらけの正輝が礫になっていた。気絶しているのか寝ているのか、ピクリとも動かなかった正輝は、両手を広げて十字架の様な形をしている。口にはタオルが巻かれ、両足は縛られ、腕と体で天井から吊るされている。そして、マジックで『本日十時より、この者の裁判を執り行う』と書かれている紙が腹に貼られていた。

既に罰を受けた後が残っているにも拘らず、凜さんは更に罰を与えるつもりらしい。

「ククッ、なんて、プッ。無惨、ププッ、な事を……」

ダメだ。どうしても正輝の無様な姿に笑いが込み上げてくる。

笑いを堪えながら正輝を助けようと思った俺は、その前にある事を思いついた。

近くにあった紙にペンで文字を書く。『僕はDMの変態です。僕を虐めてください』と。そして、腹にある紙を交換する。そして、携帯のカメラで一枚だけ写真を撮っておく。

「何だこれ!? ただの変態じゃねえか!」

朝のロビーで一人で大爆笑していた。早起きは三文の得と言うが、本当にその通りだ。まさか、こんな面白い事が待っているとは。

一頻り笑った後、俺は何事も無かったように正輝を起こす。

「おい、起きろ。何やってんだ？」

口に巻かれたタオルを取り、正輝の頬を叩いて起こす。

「ん？ ああ、琢磨か。どうし——」

目が覚めた正輝はすぐに自分の体に異変がある事に気付いた。

「そうか。昨日、凧さんに捕まったんだったな」

昨日の事を思い出したようで、正輝の顔は青ざめていた。

「あの後、何があったんだ？」

「ん？ ああ、話すから、降ろしてくれないか。完全に身動き出来ないんだよ」

正輝の願いを聞き入れ、俺は縄を解いて正輝を解放してやった。

「ああ、辛かったぜえ」

全身の筋肉が硬直していたみたいで、ゆっくりとストレッチをしながら正輝は何かを吐きだした。

「何だそれ？」

「これか？ なんと、凧さんのデジカメのメモリースティックだよ！」

唾でテカっているメモリースティックを誇らしげに見せてくる。止めてくれ、近付けるな、

汚い。

「いまいち、分かってないな。オーケー、じゃあ順を追って話すぞ？」

汚いメモリースティックにドン引きしてただけだったが、正輝が勝手に説明を始めた。

「昨日、お前と別れた後に俺はクローゼットに隠れたんだよ」

それは知っている。窓から出る瞬間に隠れていく正輝の姿を見ていたからな。

「そのすぐ後、やっぱり凧さんが部屋に入って来たんだよ。流石にあの時は心臓が破裂するんじゃないかって思ったぜ。だって、あからさまに警戒してるんだぜ。あの人、人の気配に敏感過ぎるだろ」

自分の部屋に誰が入ったとなれば、たとえ部屋の物の位置関係が変わっていなくても、気付く人間がいるかもしれない。もう、凧さんがそんな人だと言われても俺は全く動じないけどな。

「で、実際はそこでバレてたっぽいんだよ。でも、全く気付いてる素振りを見せてなかったんだぞ。それで、夜中になって突然、クローゼットを開けられて、呆気なく捕まったって訳だ。

どうやら、みんなが寝静まるのを待ってたみたいだ」

正輝が両手を上げて降伏のポーズをしている。完全に凧さんの掌の上で踊らされていたみたいだ。

「その後は酷かったぞ。部屋で叩くは投げるのは暴力三昧。ロビーに移動したと思ったら、縛りあげられて、竹刀やらエアガンやらで痛めつけられたぜ！ 口にタオルを巻かれて、夜中だったからな。いくら叫んでも誰にもバレなかったぜ！」

あれ？可笑しいな。いつの間にか恐怖体験談が快樂体験談に変わっている。こいつ、まさか……

「散々いたぶられて、俺は凧さんに放置されたって訳。で、今に至る。しかし！」

正輝が声を荒げる。

「今朝、お前に見つけてもらったのがラッキーだった。また挽回は出来る」

「メモリースティック、か」

「そう！その通り！」

正輝が指を差して言ってくる。ご名答、と聞こえてきそうだ。

「でも、よくバレなかったな」

タオルを口に巻く時に見つかりそうなものだけどな。

「そりゃあ、飲み込む一歩手前、咽の奥の方に隠したからな。これなら、短時間なら見えなくなるんだよ。危うく、唾と一緒に飲み込みそうにもなったけどな」

そう誇らしげに言ってくる正輝。お前は一体どの諜報員なんだ。

「でも、これさえこっちにあれば凧さんと戦える。さっさとプリントアウトしてこようぜ！」  
上裸で痣だらけの正輝が意気揚々と部屋に向かっていった。俺は仕方なく正輝の後に続いた。

「よし、こんなもんか」

プリントアウトした写真を目の前に達成感に満ち溢れている正輝。それと同時に俺は浅い眠りから目が覚めた。

「お？終わったのか？」

「ええ、あんたが寝ている間にな！」

「まあ、プリントアウトなんて一人いれば十分だからな」

「でしょうね！」

正輝が意気込み過ぎて変なテンションになってきている。これは止めるべきだろうか？いや、面倒だからいいか。

「それにしても結構な量だな」

「そうだな。百枚以上はあるんじゃないか？」

改めて見ても、この写真に写っているのが凧さんだとは信じられない。しかし、顔は紛れも無く凧さんだ。

「よし！飯食いに行こうぜ！腹が減っては戦は出来ぬ！」

上がりきったテンションを下げる事もせず正輝は食堂に向かった。時刻は七時半。既に朝食の時間だ。

朝食が終わり、時刻は午前十時になろうとしていた。そんな時、寮内に放送が流れてきた。

それは正輝をロビーに呼び出す放送だった。

「おっ、向こうから仕掛けてきたか。よし、手筈通り行くぞ！」

写真の束を手にし、正輝は意気込んでいる。しかし、俺はそこまで意気込んではいなかった。今さっきの放送でも呼び出されたのは正輝一人だけだ。つまり、俺は今回の問題とは無関係として扱われている。なのに、何故、わざわざ戦地に赴かなくちゃいけないのか。しかし、正輝が負ける姿を間近で見られると思えば、それほど嫌な事でもないかもしれない。

正輝が部屋を出ていった事を見送った俺は、さっき携帯で撮った写真と一文を添えて、美空に送った。

正輝はロビーに向かう途中、様々な部屋の連中を引き連れていった。凧さんの面白い姿が見られると聞けば、誰でも見たくなってしまふのは仕方が無い。

そう言った男子の騒ぎを耳にした女子も続々とロビーに集まって来た。いつの間にか、ロビーには対峙する正輝と凧さんを囲むようにギャラリーが出来上がっていた。

ギャラリーを煽る、ねえ。

正輝の手筈通りとは、俺がギャラリーを煽って凧さんのアウエーを作り上げる事。

「何でこんなに人がいるの？」

いつもと同じ、メイド姿で佇んでいる凧さん。昨日までは不思議に思っていたが、今ではその姿もだいたい違った印象に見える。

「フッフッ。今日、凧さんを頂点にする寮内勢力図は変わるんだよ！」

正輝は声を荒げて言うが、ギャラリーは完全に付いていけなかった。こいつは何を言っているんだ？ どこからともなく、そんな声が聞こえてきそうだ。

「……………」

あまりの静寂に心が折れかけたのか、正輝が助けを求める様な視線を送って来た。仕方なく、正輝の援護をしてやる事にした。

「つまり、凧さんの恥ずかしい物を用意したって事だ」

俺の言葉でようやく理解した様でギャラリーはそれなりの盛り上がりを見せた。

「…………アレの事？」

盛り上がりを見せるロビーの中で凧さんだけが動揺していた。流石にアレをここでバラされる事は避けたいらしい。

「そうですね。手に入れちゃったんですよ。良いんですか？ みんなに見せちゃいますよ？」  
写真を凧さんに見える様にチラつかせ、正輝が下衆の様な笑みを浮かべる。

「…………何が目的なの？」

正輝の強気な態度に押される様に凧さんの声はいつもと比べて弱かった。

「そりゃあ、まずは待遇の改善ですよ」

正輝の言葉を聞いて、俺はダメだと思った。なぜなら、正輝が凧さんに対して敬語を使って

いるからだ。正輝は無意識なのだろうけど、敬語を使っている時点で自分の方が低い事を証明してしまっている。

「それから、昨日の事は不問にして、謝罪でもしてもらいましょうかね。みんなの前でね！」  
正輝は勝ち誇っていた。凜さんが何も言い返してこない事を良い事に。しかし、そんな正輝優勢の状況は一変する。

俺は正輝の死角からギャラリーの中の美空に合図を送る。その合図を受け取った美空はすぐさま携帯を操作し、メールを送った。その相手は凜さんだ。

「……………」

着信を無視しようとする凜さんに向かって、俺は携帯を開く様にジェスチャーを送る。ジェスチャーを頼りに凜さんがメールを確認すると、そこには目の前の男の変態的な姿の写真があった。

「ククッ……フフッ……」

笑いを堪える凜さんを見て、正輝は訳が分からないと言った表情をしていた。

「……なんだ？」

「もう一度、話を聞きましょうか？」

不意に凜さんが正輝に言う。既に、ついさっきまでの動揺した様子はどこにも無かった。その瞬間、俺は正輝の負けを確信し、心の中でガッツポーズをした。

「だから、凜さんは俺の言う事を聞かなくちゃいけないんですよ」

「何故？」

「凜さんが俺に弱みを握られているからです」

「なるほど。それで？」

「……初めに！ 昨日の夜の仕打ちを謝罪してもらいましょうかあ！」

弱い犬程よく吠える、とはよく言うが、今の正輝の状態にピッタリの言葉だ。少しでも状況が悪化し、語尾が強くなり始めた。

「昨日の夜の事？」

「そうですよ！ 俺に散々酷い事したじゃないですか!？」

正輝と凜さんの言い合いを見つめるギャラリーたち。しかし、正輝が詳しい事情を一向に明かさないう事に盛り下がってきているみたいだった。

「もう良いですよ！ この写真はバラまかせてもらいます！」

自分と周囲の温度差を感じ取ったのか、正輝はやけを起こしてしまった。

「ちよっと——」

凜さんの制止に聞く耳を持たずに、写真の束を辺りに撒き散らした。

「——!!」

お互いに手札を持っていた事で均衡していたバランスが崩れてしまった。こうなってしまう

ては、もう泥仕合しか残されていない。

写真が散らばった瞬間、正輝は自分の後ろ盾が無くなった事に気付いた。そして、凜さんは今にも正輝を殺しかねない目で睨んでいた。しかし、

「……ああ、これってさ——」

写真を見た女子生徒が拍子抜けといった感じで口にした。

「前にも見た事あるよね」

女子生徒たちが口々に同じ事を言っている。目新しい物ではなく、既に知っている様な口ぶりだ。

対照的に男子生徒は誰もが初めて見る凜さんの姿だった。しかし、その反応は正輝の想像通りではなく、むしろ、歓喜していた。

凜さんの写真がばら撒かれた事でロビーは更に盛り上がった。と言っても、主に男子だ。女子生徒からは、既に見た事があると、男子生徒からは、喜びの声が上がっていた。

凜さんの写真を使って悪巧みを考えたのは、正輝だけだった。

「……………」

茫然としている凜さんにとっても、想定外の出来事だった様だ。隠すぐらいなのだから、みんなに受け入れられるとは思っていなかったはずだ。それが受け入れられている。しかも、既にバレてもいた。

「凜さんっ！」

ギャラリイの中にいた美空が声を上げた。それが合図になった様に凜さんは我に返っていた。そして、再び正輝を睨みつける。完全に捕食者の目だ。

「これが、弱み？」

「……………うっ」

「それで、他には無いの？」

「……………くっそお」

既に手札を出し尽くした正輝はもう何も出来なかった。対して凜さんは正輝の写真を持ち、力でねじ伏せる事も出来る。圧倒的な戦力差だ。

「で？ 謝罪して欲しいの？」

「……………ええ、まあ……………」

「何故？」

「……………昨日の仕打ちはあまりにも酷いかと……………」

「何故、あんな仕打ちをされたのか分かっているの？」

「……………」

「黙秘では逃げられないわよ。あんたはね、昨日、寮長室に無断で入ったのよ」

「……………」

もはや、公開処刑だった。周りの女子生徒からは、キモい、だの、信じられない、など聞こえてくる。

「寮長室に入っただけなら、昨日の夜だけで終わりにしても良かったんだけど、こんな事までしたらねえ？」

凜さんは正輝ではなく、周りの生徒たちに聞いていた。それに答える様に生徒たちは頷いている。正輝が話していた時とはえらい違いだ。これが人徳の差なのだろう。

「正輝、あんたへのお置ききとして、私がやられた事と同じ事をするわ」

「……………え？」

凜さんは携帯を操作し、これ見よがしにボタンを押した。そのすぐ後、正輝の携帯が鳴り響いた。

凜さんに携帯を開く様に促され正輝は自分の携帯を開いた。

「何だこれ!？」

正輝が愕然としていた。なんせ、自分が上裸で縛られて、DM宣言をしている写真だ。愕然としない方がおかしい。

「それをみんなに見せるわ」

携帯を正輝に見せつけて凜さんが言っている。

「…………ちよつと……………」

「ちなみに、寮長である私の携帯には全学生のメールアドレスが入っているのよ。初めの数人に送信してしまえば、後はウィルスのように広がるわ」

携帯の送信画面をチラつかせている。その動きに合わせる様に正輝がオロオロしていた。

「…………ハハハッ、待ってくださいよ。いくら何でもその冗談は…………」

「冗談なんかじゃないわ。ほら?」

凜さんが送信ボタンを押しこむと、画面にメールが飛んでいく絵が現れ、『送信完了』と表示された。その瞬間、生徒の方から携帯の着信音が聞こえてきた。

「…………ああ!!」

「残念。もう送信しちゃったわ」

音符マークが付きそうなくらいに上機嫌で凜さんが言っていた。

生徒の中からは大きな笑い声が聞こえてくる。そして、至る所で着信音が鳴り始める。

「おい、やめろ! やめろおおお!!」

正輝の叫びが空しく響き渡る。しかし、誰一人正輝の言葉なんて聞いてはいなかった。もうこうなったら止める事なんて出来る訳が無い。

「うわああああ!!」

正輝が叫びながら膝から崩れ落ちた。顔を床に押しつけて、耳を塞いでいる。

「これでチャラにしてあげるわよ」

凜さんが優しく正輝の肩に手を置く。しかし、正輝は現実逃避を続けていた。

「琢磨、正輝を連れて行きなさい。当分、立ち直れないでしょうからね」

凜さんの言葉に従って、俺は正輝に肩を貸した。

「今回は写真を用意したから、あんたは許してあげるわ」

去り際、俺は凜さんにそう言われた。どうやら、俺が寮長室に入っていた事も正輝の写真を撮った事もバレていたみたいだ。

……どうやっても、凜さんには勝てないな。

見逃された安堵と共に素直にそう思った。



正輝の心の傷が癒えぬまま、凜さんとの騒動から一週間が経った。

寮では友人からの容赦ない弄り、学校に行けば止め処なく弄られる。その度に耳を塞いで現実逃避をしていた。

「いい加減分かっただろ？ お前は凜さんに勝つ事は出来ないんだよ」

「……………」

俺は正輝の部屋にやって来て話していた。

「あの後、凜さんの隠し事がおおっぴらになっただけから、女子とは撮影会みたいなことしてるらしいし、男子からはファンが生まれるぐらいだ。そのうち、ファンクラブが出来るとはならないか？ どっかのアイドル並みだな」

「……………」

さつきから俺が一方的に話している。正輝はまだあの写真の事を引きずっているのか、一言も発さない。

「まあ、今にして思えば、おかしかったよな。女子は凜さんの隠し事を知ってたみたいだし、美空が知らない筈が無いもんな。またあいつにやられたな」

「……………」

いくら話題を振っても何の返答も無かった。そんな時、不意に部屋のドアが開かれた。

「呼んだ？」

ドアを開け、中に入って来たのは美空だった。

「お前、何でいるんだよ。ここ、男子フロアだぞ？」

「あれ？ 知らないの？ 男子が女子フロアに行くのは原則禁止だけど、女子が男子フロアに行くのは、凜さんに言えば大丈夫なんだよ」

意外そうな顔をして、美空が言っている。

「そうだったのか」

「今の琢磨の疑問だけど、私は前から凜さんの写真の事は知ってたよ」

「やっぱりな……。でもどうして知ってたんだ？」

美空は全く悪びれずに平然と言ってくる。正輝が何の反応も示さないからって簡単に白状するな。

「凜さんって寮長になる前にあんな感じの写真をネットで公開してたんだよ。今はもうどこにも無いけどね。それを持った娘がいてね。女子の中では密かに知られてたんだよ」

「なるほどね、納得」

おそらく学生時代にネット上でそういう活動をしていたんだろう。それを寮長になる時に止めたってところだろうな。

「で、お前は何しに来たんだ？」

美空はわざわざこんな話をしに来た訳ではないだろう。

「そうそう。前回の事は失敗に終わっちゃったからね。反省会兼次の作戦の会議をしようと思ってるね」

全く反省の色を見せない口ぶりだ。と言っても、美空は怒られてもいないんだから当たり前か。

「また何かやるのか？」

「そりゃあ、そうでしょ。正輝もこのままじゃ終われないでしょ？」

「……………おう！」

美空の問いかけに正輝が反応した。ずいぶん間を開けての反応だったが、しっかりと反応した。

「このままで終われる訳が無いだろ！絶対に凜さんに復讐してやるぜっ！」

「そうだよねえ。正輝がその気なら私はいくらでも協力するよ！」

「マジか!? それは助かるぜ！」

美空に乘せられていつも通りの正輝に戻っていた。俺はそれを止めずに見ていた。

「前は事前に凜さんの隠し事がバレていたから、効果が出なかったけど、今回はちよっと自信があるんだよねえ」

笑顔で言っている美空に対し、正輝は、そうなんだ、と相槌を打っている。

正輝の中では美空に嵌められたという認識は無いみたいだ。どうせ、今回も正輝が美空に嵌められる構図は全く揺るがないんだろう。

「今回は——」

しかし、俺はあえてそこは指摘しなかった。

「オッケー！ 任せろ！」

その方が面白いからだ。